

学 位 論 文 要 旨

研究題目 (注：欧文の場合は、括弧書きで和文も記入すること)

Association between Higher Body Mass Index and Pouch-Related Complications during Restorative Proctocolectomy in Patients with Ulcerative Colitis

(潰瘍性大腸炎手術症例における BMI と pouch 合併症との関連)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学 専攻 器官・代謝制御系

炎症性腸疾患学 (指導教授 池内 浩基)

氏 名 堀尾 勇規

(目的) 肥満が炎症性腸疾患の手術に及ぼす影響については、未だ一定の見解が得られていない。今回、潰瘍性大腸炎(Ulcerative colitis; 以下 UC)手術症例において、Body Mass Index (以下 BMI)と術後合併症の関連性について明らかにすることを目的とした。

(対象と方法) 2012年4月～2015年8月までのUC手術症例 299例のうち、大腸全摘術、回腸囊肛門吻合術(以下IPAA)、あるいは回腸囊肛門管吻合術(以下IACA)を二期分割で行った165例を対象とした。BMIを肥満群と非肥満群に分類し、BMI:25 kg/m²以上を肥満と定義した。対象症例の患者背景、手術因子、術後合併症(Clavien-Dindo分類 ≥grade2)について後ろ向きに検討した。またPouchからの出血、吻合部狭窄、縫合不全をpouch関連性合併症と定義し、そのリスク因子についても検討した。

(結果) 肥満群 16例、非肥満群 149例であった。性別、発症と手術時年齢、病悩期間、重症度、術前内科治療などの患者背景は、両群間に統計学的に有意差を認めなかった。手術に関しては、肥満群で手術時間の中央値は282分、非肥満群で228分であり有意に延長し(p<0.01)、出血量も肥満群で中央値355ml、非肥満群で210mlであり有意に増加を認めた(p<0.01)。創部感染症、腹腔内膿瘍、腸閉塞、血栓症、入院期間では有意差は認められなかったが、pouch関連性合併症は、全体で25例(15.2%)に認められ、非肥満群(12.1%)に比べて肥満群(43.5%)で有意に多く認められた(p<0.01)。pouch関連性合併症の発症予測因子として、性別、年齢、病悩期間、BMI、重症度、ステロイド総投与量、術前免疫調整剤と生物学的製剤の投与の有無について挙げ、これらの項目について多変量解析にて検討すると、男性(OR=3.86, 95% CI 1.23-15.4, p=0.02)とBMI ≥25 kg/m²(OR=5.87, 95% CI 1.59-21.67, p<0.01)が独立したリスク因子として抽出された。

(結語) UC手術症例において肥満群は、有意にpouch関連性合併症が多く、pouch関連性合併症のリスク因子としては、男性、BMI ≥25 kg/m²がリスク因子として抽出された。男性で、BMI:25 kg/m²以上でpouchが肛門まで届きにくいことが予想される症例は、3期分割手術とし、初回手術は結腸全摘術のみにすべきかもしれない。